

小学校低学年の頃、自宅にあった「星と星座」という図鑑に夢中になっていました。その中に「こと座のリング星雲（M57）」という写真が載っていて、目が釘づけになりました。名の通りリング状の星雲で、しかも色鮮やかな天体でした。私は「こんなにきれいな色の輪っかみたいなのが、本当に宇宙のどこかに浮かんでるのかなあ？」と思ったものです。

大学生の時、星好きの友人の影響で、自分も天体写真を撮るようになりました。どうしても撮りたかったのが、この「こと座のリング（M57）」でした。しかし、この星雲は「惑星状星雲」の中でも特に視直径が小さく、当時の機材とリバーサルフィルムではリング状にはならず、ほかの恒星と見分けがつかないような、単なる「点」にしか写りませんでした。

その後、「冷却 CCD」という天体機材が登場し、天体写真の世界が一変しました。光害にも強く、都会地でも撮影可能という宣伝もありました。実際に新宿駅前でメーカーの撮影デモがあり、私も見学に行ったものです。そこで狙っていたのが「こと座のリング（M57）」でした。さすがに新宿駅前で撮った写真では、色もよくわからないぼーっとしたリングが写っているだけでした。しかし、新宿で星雲の写真が撮れるということに感動したものです。

あれから 30 年以上、私にとってこの星雲は「幻」のままで、唯一度も撮影できずにいました。ところが昨夜、いとも簡単に撮影に成功しました。露光わずか 2 分、しかも東京山手線内（文京区大塚）で・・・です。「幻のリング」は、本当にぽっかりと虚空に浮かんでいました。

（2024 年 11 月 19 日／お茶の水女子大学文教育学部一号館屋上／東京都文京区／Seestar で撮影／120 秒露光）

